令和５年度

日　章　学　園

鹿児島育英館高等学校

入 学 試 験 問 題

国　　語

（時間 45 分）

（注　意）

1　「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。

2　問題は、７ページあります。解答用紙は１枚です。

3　「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、中学校名、氏名を記入しなさい。

4　答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。

5　印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。

6　「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具をおき、解答用紙だけを裏返しにして、机の上におきなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

およそ人として社会で生きていくとき、常識はどんな地位にいても必要であり、なくてはならないものである。では、常識とはどのようなものなのだろう。わたしは、次のように解釈する。

まず、何かをするときに極端に走らず、頑固でもなく、善悪を見分け、プラス面とマイナス面に(a)敏感で、言葉や行動がすべて中庸(I)にかなうものこそ、常識なのだ。これは学術的に解釈すれば、

「智、情、意（知恵、情愛、意志）」

の三つがそれぞれバランスを保って、キントウ(ア)に成長したものが完全な常識であろうと考える。さらに言葉を換えるなら、ごく一般的な人情に通じて、世間の考え方を理解し、物事をうまく処理できる能力が、常識に外ならない。

人の心を分析して、「智、情、意」の三つに分類するというのは、心理学者の説に基づくものだが、この三つの調和がいらないという者など誰もいないだろう。知恵と情愛と意志の三つがあってこそ、人間社会で活動ができ、現実に成果をあげていけるものである。ここでは、常識の原則である(b)、「智、情、意」の三つについて、すこし述べてみたいと思う。

1 「智」とは、人にとってどのような働きをするのだろう。人として知恵が充分に発達していないと、物事を見分ける能力に不足してしまう。たとえば、物事の善悪や、プラス面とマイナス面を見抜けないような人では、どれだけ学識があったとしても、よいことをよいと認めたり、プラスになることをプラスだと見抜いて、それを採ることができない。学問が宝(II)の持ち腐れに終わってしまうのだ。この点を思えば、①知恵がいかに人生に大切であるかが理解できるだろう。

2 「智」ばかりで活動ができるかというと、決してそうではない。そこに「情」というものがうまく入ってこないと、「智」の能力は十分に発揮されなくなってしまう。

3 「智」ばかりが膨れ上がって情愛の薄い人間を想像してみよう。自分の利益のためには、他人を突き飛ばしても、蹴飛ばしても気にしない、そんな風になってしまうのではあるまいか。

4 知恵が人並み以上に働く人は、何事に対しても、その原因と結果を見抜き、今後どうなるかを見通せるものだ。このような人物に、もし情愛がなければたまったものではない。その見通した結果までの筋道を悪用し、自分がよければそれでよいという形で、どこまでもやり通してしまう。この場合、他人に降りかかってくるメイワク(イ)や痛みなど、何とも思わないほど極端になりかねない。そのバランスの悪さを調和していくのが、「情」なのだ。

「情」は一種の緩和剤(ウ)で、何事もこの「情」が加わることによってバランスを保ち、人生の出来事に円満な解決を与えてく

れるのである。もしも人間の世界から「情」という要素を除いてしまったら、どうなるのだろう。何事も極端から極端に走って、ついにはどうしようもない(c)結果を招いてしまうに違いない。だからこそ、②人間にとって「情」はなくてはならない機能なのだ。

しかし、「情」にも欠点があって、それはシュンカン(エ)的にわきあがりやすいため、悪くすると流されてしまうことだ。特に、人の喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、愛しさ、憎しみ、欲望といった七つの感情は、その引きおこす変化が激しいため、心の他の個所を使ってこれらをコントロールしていかなければ、感情に走り過ぎるという弊害(オ)を招いてしまう。この時点で、「意志」というものの必要性が生じてくるのである。

動きやすい感情をコントロールするものは、強い意志より他にはない。だからこそ、「意」は精神活動の大本(Ⅲ)ともいえるものだ。強い意志さえあれば、人生において(d)大きな強みを持つことになる。しかし意志ばかり強くて、他の「情」や「智」がともなわないと、単なる頑固者や強情者になってしまう。根拠なく自信ばかり持って、自分の主張が間違っていても直そうとせず、ひたすら我(が)を通そうとする。

もちろん、③こんなタイプも、ある意味から見れば尊重すべき点がないでもない。しかし、それでは一般社会で生きる資格に欠け、精神的に問題があって完全な人とはいえない(e)のだ。強い意志のうえに、聡明な知恵を持ち、これを情愛で調節する。さらに三つをバランスよく配合して、大きく成長させていってこそ、初めて完全な常識となるのである。

現代の人は、よく口癖のように「意志を強く持て」という。しかし意志ばかり強くてもやはり困りものでしかない。俗にいう「猪武者(いのししむしゃ)(突き進むことしか知らない武者)」のような人間になっては、どんなに意志が強くても社会で役に立つ人物とはいえないのである。

(渋沢栄一「論語と算盤」より)

問一　傍線部ア～オまでのカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなに直しなさい。

問二　傍線部Ⅰ～Ⅲの語句の意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　中庸

ア　当たり障りのないこと
イ　平凡であること
ウ　かたよらないこと
エ　忠実であること

Ⅱ　宝の持ち腐れ

ア　役に立つものを利用してだめにすること
イ　役に立つかどうかを判断しないこと
ウ　役に立つかがわからずに利用しないこと
エ　役に立つものを持ちながら利用しないこと

Ⅲ　大本

ア　物事の根本となるもの
イ　はじまりとして役立つもの
ウ　実際に役立つもの
エ　応用されるもの

問三　[1]～[4]の中に、入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　たとえば　　イ　もともと　　ウ　しかし　　エ　ちょうど　　オ　まず

問四　この文章の見出しを次のように付けるとき、空欄に当てはまる適当な語句を本文中から抜き出して答えなさい。

「　　」とはどのようなものなのか

問五　傍線部①「知恵がいかに人生に大切であるか」について、知恵が大切な理由を本文の語句を用いて、四十字以内で答えなさい。

問六　傍線部②「人間にとって『情』はなくてはならない機能なのだ」について、その理由を「情」という言葉を使って三十字程度で答えなさい。

問七　傍線部③「こんなタイプ」とあるが、どのような人のことか、本文中から二つ抜き出して答えなさい。

問八　本文は「論語と算盤」の一部である。「論語」は中国の古典であり、ある思想家の発言や行動をまとめた書物である。その思想家の名前を漢字で答えなさい。

問九　二重傍線部（a）～（e）の品詞名をそれぞれ漢字で答えなさい。

二

次の〈文章Ⅰ〉、〈文章Ⅱ〉を読んで後の問いに答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

芭蕉はさっき、痰喘にかすれた声で、おぼつかない遺言をしたあとは、半ば眼を見開いたまま、昏睡の状態にはいったらしい。うす痘痕のある顔は、顴骨ばかりあらわにやせ細って、皺に囲まれた脣にも、とうに血の気はなくなってしまった。ことにいたましいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、①際限ない寒空でも望むように、②いたずらに遠い所を見やっている。A「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」――ことによるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三、四日前に彼自身が、その辞世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のように漂ってでもいたのかもしれない。

「水を。」

*木節はやがてこう言って、静かに後ろにいる治郎兵衛を顧みた。一椀の水と一本の羽根楊子とは、すでにこの老僕が、用意しておいたところである。彼はその二品を［　　］主人のまくらもとへ押し並べると、思い出したようにまた、口を早めて、専念に称名を唱えはじめた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にもせよ、ひとしく彼岸に往生するのなら、ひとしくまた、弥陀の慈悲にすがるべきはずだという、堅い信念が根を張っていたからであろう。

（中略）

*其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さっき木節が相図をした時から、すでに心の落ち着きを失っていたらしい去来である。日ごろから恭謙の名を得ていた彼は、一同に軽く会釈をして、芭蕉のまくらもとへすりよったが、そこに横たわっている老俳諧師の病みほうけた顔をながめると、ある満足と悔恨との不思議に錯雑した心もちを、嫌でも味わなければならなかった。しかもその満足と悔恨とは、まるで陰とひなたのように、離れられない因縁を背負って、実はこの四、五日以前から、絶えず小心な彼の気分を掻乱していたのである。と言うのは、師匠の重病だという知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乗って、深夜にもかまわず、この花屋の門を叩いて以来、彼は師匠の看病を一日も怠ったという事はない。その上*之道に頼みこんで手伝いの周旋を引き受けさせるやら、*住吉大明神へ人を立てて病気本復を祈らせるやら、あるいはまた花屋仁左衛門に相談して調度類の買入れをしてもらうやら、ほとんど彼一人が車輪になって、万事万端の世話を焼いた。それはもちろん去来自身進んで事に当ったので、誰に③恩を着せようという気も、皆無だったことは事実である。が、一身をあげて師匠の介抱に没頭したという自覚は、いきおい、彼の心の底に大きな満足の種をまいた。それがただ、意識せられざる満足として、彼の活動

の背景に暖い心もちをひろげていたうちは、もとより彼も行住坐臥に、なんらのこだわりを感じなかったらしい。さもなければ夜伽の行灯の光の下で、支考と浮世話にふけっている際にも、ことさらに孝道の義を釈いて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へるつもりだなどと、長々しい述懐はしなかったであろう。しかしその時、得意な彼は、人の悪い支考の顔に、ちらりとひらめいた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂いのできた事を意識した。そうしてその狂いの原因は、はじめて気のついた自分の満足と、その満足に対する自己批評とに存していることを発見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配することか、いたずらに自分のほねおりぶりを満足の眼で眺めている。――これは確に、彼のごとき正直者の身にとって、自らやましい心もちだったのに違いない。それ以来去来は何をするのにも、この満足と悔恨との扞挌から、自然とある程度の掣肘を感じ出した。まさに支考の眼のうちに、偶然でも微笑の顔が見える時は、かえってその満足の自覚なるものが、いっそう明白に意識されて、その結果いよいよ自分の卑しさを情なく思ったこともたびたびある。それが何日か続いた今日、こうして師匠のまくらもとで、末期の水を供する段になると、道徳的に潔癖な、しかも存外神経の繊弱な彼が、④こういう内心の矛盾の前に、全然落着きを失ったのは、きのどくではあるが無理もない。だから去来は羽根楊子をとり上げると、妙に体中が固くなって、その水を含んだ白い先も、芭蕉の脣をなでながら、しきりにふるえていたくらい、異常な興奮に襲われた。が、幸、それと共に、彼の睫毛にあふれようとしていた、涙のたまもあったので、彼を見ていた門弟たちは、おそらくあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釈していたことであろう。

やがて去来がまた憲法小紋の肩をそば立てて、□席に復すると、羽根楊子はその後ろにいた丈艸の手へわたされた。日ごろから老実な彼が、つつましく伏眼になって、何やらかすかに口の中で誦しながら、静かに師匠の脣をうるおしている姿は、おそらく誰の見た眼にもおごそかだったのに相違ない。が、このおごそかな瞬間に突然座敷の片すみからは、⑤不気味な笑い声が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思われたのである。それはまるで腹の底からこみ上げてくる哄笑が、喉と唇とに堰かれながら、しかもなおおかしさに堪えかねて、ちぎれちぎれに鼻のあなから、ほとばしってくるような声であった。が、言うまでもなく、誰もこの場合、笑を失したものがあったわけではない。声は実にさっきから、涙にくれていた*正秀の抑えに抑えていた慟哭が、この時胸を裂いてあふれたのである。その慟哭はもちろん、悲愴をきわめていたのに相違なかった。あるいはそこにいた門弟の中には、「塚も動けわが泣く声は秋の風」という、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかったことであろう。が、その凄絶なるべき慟哭にも、同じく涙にむせぼうとしていた*乙州は、その中にある一種の誇張に対して、――というのが穏でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の欠乏に対して、多少不快を感じずにはいられなかった。ただ、そういう不快の性質は、どこまでも智的なものにすぎなかったのであろう。彼の頭が否と言っているにもかかわらず、

彼の心臓はたちまち正秀の哀慟の声に動かされて、いつか眼の中は涙でいっぱいになった。が、彼が正秀の慟哭を不快に思い、ひいては彼自身の涙をも潔しとしない事は、さっきと少しも変りはない。しかも涙はますます眼にあふれてくる――乙州はついに両手を膝の上についたまま、思わず嗚咽の声を発してしまった。が、この時獻欷するらしいけはいを洩らしたのは、ひとり乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控えていた、何人かの弟子の中からは、それとほとんど同時に洟をすする声が、しめやかにさえた座敷の空気をふるわせて、断続しながら聞え始めた。

※問題作成の都合上、文章の一部を省略しています。

（芥川龍之介「枯野抄」より）

＊木節　望月木節。大津の医者。芭蕉の門人。

＊其角　榎本其角。寛文元年―宝永四年（一六六一―一七〇七）。蕉門十哲の一人。宝井氏。近江の人。江戸に出て蕉門に入ったが師没後は、知的技巧に富み都会的で軽妙洒脱な俳風を確立、江戸座を起こした。その選に「虚栗（みなしぐり）」がある。

＊之道　槐本之道。大坂蕉門の第一人者。

＊住吉大明神　大阪市住吉区にある住吉神社。

＊支考　各務支考。寛文五年―享保十六年（一六六五―一七三一）。美濃の人。蕉門十哲の一人。芭蕉没後平俗な美濃風を開く。

＊正秀　水田正秀。近江の人。元禄初年に蕉門に入ったらしい。句風は平明温雅。

＊乙州　川井乙州。近江の人。蕉門女流俳人として名高い智月の子。

〈文章Ⅱ〉

福井は三里ばかりなれば、夕飯したためて出づるに、たそかれの路たどたどし。ここに等栽といふ古き隠士あり。いづれの年にか、江戸に来たりて予を尋ぬ。遙か十年余りなり。いかに老いさぼらひてあるにや、はた市に蹴るにやと人に尋ね侍れば、「いまだ存命して、そこそこ」と教ふ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔・へちまの延えかかりて、鶏頭・箒木に戸ぼそをかくす。⑥「さてはこのうちにこそ」と門をたたけば、わびしげなる女の出でて、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは、このあたり何某といふ者の方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へ」と言ふ。⑦かれが妻なるべしと知らる。⑧昔物語にこそかかる風情は侍れと、やがて尋ねあひて、その家に二夜泊まりて、名月は敦賀の湊にと旅立つ。

＊等栽…俳人の名前

＊隠士…俗世間と交わりを絶った生活をしている人
＊御坊…僧侶

問一　本文中の空欄□には同じ言葉が入ります。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　まじまじ　　イ　おずおず　　ウ　じわじわ　　エ　ざわざわ

問二　傍線部①～③の言葉の意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。
①際限ない　〔ア　しかたがない　　イ　無理がない　　ウ　終わりがない　　エ　決まりがない〕
②いたずらに　〔ア　わざと　　イ　むだに　　ウ　無理に　　エ　そっと〕
③恩を着せ　〔ア　感謝させる　　イ　いつくしむ　　ウ　気づかせる　　エ　ほうびを与える〕

問三　傍線部④「こういう内心の矛盾」が指している内容を、本文の語句を用いて答えなさい。

問四　傍線部⑤「不気味な笑い声」は、実際は何でしたか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五　二重傍線部A、Bはそれぞれ、〔文章Ⅰ〕の波線部「芭蕉」の作品です。次の問いに答えなさい。
Ⅰ　二重傍線部Aの俳句の季語を抜き出し、その季節も答えなさい。
Ⅱ　二重傍線部Bの俳句と同じ季節の俳句を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。
ア　五月雨の踏みのこしてや光堂
イ　初しぐれ猿も小蓑（こみの）をほしげなり
ウ　古池や蛙（かわず）飛び込む水の音
エ　菊の香や奈良には古き仏たち

問六　文章Ⅱは松尾芭蕉の文章です。この文章の作品名を次の中から選び、記号で答えなさい。
ア　土佐日記　　イ　おらが春　　ウ　奥の細道　　エ　東海道中膝栗毛　　オ　去来抄

問七　破線部a～dの主語は何ですか。次の中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。
ア　等栽　　イ　女　　ウ　人　　エ　何某　　オ　作者（私）

問八　傍線部⑥「さてはこのうちにこそ」を、言葉を補って現代語訳しなさい。

問九　傍線部⑦「かれ」が指すものは何ですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問十　傍線部⑧「昔物語にこそかかる風情は侍れ」とありますが、ここに使われている修辞法を答えなさい。